＜実践論文＞

歴史教育環境の変容とその課題

－高等学校における社会科系部活動運営の混迷から－

須　賀　忠　芳*

1．問題の所在

高校生の学校生活において，部活動の占める割合は非常に大きいことが推察される。東らは，「70％以上の生徒は学校での部活動の存在意義を高く評価」し「日常生活には部活動への参加が『楽しい学校生活』に結びついている状況が見られた」としている[(1)]。一般にいわゆる進学校においても勉強一辺倒ではない「文武両道」を校訓として掲げ，部活動への参加を積極的に促している学校も多い。部活動と受験との関係でみれば，筆者は，１校単年度の数値ではあるが，２年次末の成績層と受験結果を比較した場合，上位層ではそれほど変化はないものの，中位層においては，進学者数及び国公立大進学者数の割合は，いずれも部活動参加者が不参加者を大きく上回り，次年度受験者（いわゆる浪人）数では部活動参加者の方がその割合は低いことを明らかにしており[(2)]，「部活動をやっていた者は集中力がある」「部活動をやっていた者は最後は勉強を追い上げていく」とする一般の言説は実証性のあるものともいえ，一つの関門として「勉強と部活の両立」が求められるとともに，友人関係や社会性を体得する場としても，学校生活における部活動の効用が説かれることが多い[(3)]。

一方で，高等学校の部活動の現状をみると，部活動参加者の多くは，運動部系に偏り，運動部を除く文化部系統，中でも部員数の多い吹奏楽部等の芸術系を除いた文化部の活動は，軽視される傾向にあるといえるのではないだろうか。たとえば，１校単位の統計とはいえ，部活動に関する東らの調査によれば，部活動に対して多くの者が求めているものは「楽しさ」であり，参加部活動は運動部が78.6％を占めている[(4)]。また，生徒文化における部活動の位置づけについて，白松は，高校生の中で「部活動参加者」が学校内でステータスが高いとして「部活動参加者を志向するステータスシステムが存在する」と指摘するが[(5)]，ここでの部活動参加者は「詳細に見れば運動系の部活動参加者」とする留保がなされている。こうした指摘は，筆者の高校現場での実感とも一致するものがある。実際，筆者が現任高において顧問を務める「地理歴史部」（一般に，「地歴部」と称されている。以下その表記による）のような文化部，社会科系部活動は生徒たちから忌避される傾向にさえあるといえる。地歴部は，一般生徒の言によればそのイメージは「暗い」のだそうで，その結果，部員ですらも自分が地歴部に所属していることはあまり公言しないということもある。また，途中で地歴部を退部していった生徒の言に「地歴部の活動は勉強の延長のようでいやだった」とし，その活動が「楽しくない」ことを退部の理由として挙げていたことも興味深い。「勉強の延長」でわからないことがわかる，ことにこそ，文化的活動のおもしろみがあるにちがいないのであるが，勉強とは別物である「楽しさ」としての価値を部活動に求める生徒の部活動観に，地歴部の活動がなじんでいかないというのが現況なのである。

このように高等学校における社会科系部活動の運営は危機的状況にあるといえる。そして，それは近年さらに高まっており，そうした状況は歴史教育はもとより社会科教育全体への課題を内包するものともなっていると捉えることができる。本稿では，社会科系部活動運営の現況を通して，特に，歴史教育環境の変容が進んでいる状況を指摘し，その課題を明らかにすることを主眼と

＊福島県立会津高校

する。

2．地歴部の混迷

筆者が，当校地歴部の顧問となって，2007年度で6年目となる。顧問就任前年までの地歴部の活動実績はほとんどなく，部活動としての地歴部の活動そのものが機能していなかったのがその当時の状況であった。顧問初年の部編成の時間には，教室に入りきれないほどの「入部希望者」の多さに驚いたものだが，その部員のほとんどは，活動意志の全くないいわゆる「幽霊部員」「帰宅部」とされる生徒たちであった。部活動全員登録の建前から，「登録する部が特に無かったら，地歴部に」という一部担任の「指導」も部登録時にはなされていたと聞き，単に部員登録のみをする者がほとんどで，およそ部活動の体はなされていなかった。顧問になった最初の年，3年に1度の公開文化祭・学而祭があって，会津藩23万石を形作った保科正之を題材にした展示発表に取り組んだ。この時，展示に関わった生徒は3年生1人，2年生1人。翌年，活動に関わった生徒も1年生1人であった。

ところが，このような地歴部の活動は，1980年代までは大変盛んであったことがわかる。たとえば，部室には，昭和20年代の年次・日付を付した石器・土器類がいくつもあり，これらは，当時の生徒が地域の遺跡から発掘した遺物で，中には，会津地方の考古学史に関わるものもある[(6)]。また，同窓生で在学時は地歴部に所属していた50代半ばの本校社会科教員は，「生徒達で計画をたてて周りの史跡を毎週のように見にいった。大内宿（近世宿駅の家並みが現存する地区。山あいの山村で会津若松市中心部から車でも40分程度かかる）の宿場見学の計画をたててみんなで歩いていったこともあった」と当時の活動をふりかえっている。1980年代半ばごろ顧問であった教員も，宿泊を伴う巡検なども生徒が班別に綿密な計画をたてて顧問に持ってきてそれをもとに実施した，顧問の手をわずらわせることはほとんどなかった，と述懐している。

1990年代初めに刊行された『会津高校百年史』でも地歴部の項は次のように記されている。

> 地歴部の研究対象は郷土会津であり，考古・歴史・文化財・観光・交通・産業・地理・経済・政治等，社会科全般にわたる。幅広い観点から郷土を探り，我々の祖先がいかにして今日の文化を築き上げたのかを調査するのがこの部の大きな目的である。
>
> 四十年代（筆者注，年代は昭和の元号表記による）には会津にとどまらず，入水鍾乳洞，信州・日本アルプス，登呂遺跡，佐渡島，尾瀬などを訪れ，地理的，歴史的特徴を探った。四十四年には学而祭での展示のために，観光面

表1　『学而会雑誌』にみる会津高等学校地歴部の活動状況（1980年～1989年）

号数	発行年度	記載有無	記事概要		
			研究テーマ・組織	発表	研修旅行・巡検
73	1980	○	喜多方事件・電源開発にゆれる旧宿場大内・会津特産の焼物や漆器		
74	1981	○	地理班・歴史班・産業班に分かれ各班ごとに活動	学而祭（校内文化祭、以下同じ）展示	
75	1982	○	地理班・歴史班・産業班に分かれ各班ごとに活動		山形
76	1983	○	喜多方事件百周年記念大会参加（資料収集と発表）、新宮川ダムと水没する村・会津桐		信州（穂高）
77	1984	○	部誌発行	学而祭展示	裏磐梯
78	1985	○	会津木綿		
79	1986	○	会津高創立当時の生徒の様子や戦争との関わり・本郷焼		
80	1987	○	校舎模型製作・芦名一族・会津の地酒	学而祭展示	
81	1988	○	地理班・歴史班・産業班共同で鉱山調査		
82	1989	○	部誌発行		仙台・平泉

（会津への観光客に対する意識調査など）と寺院建築面（恵日寺，勝常寺，法用寺など）に分かれて徹底的な調査研究を行った。また四十六年には教育委員会の手伝いとして，大塚山古墳の発掘に従事し，石棺の上部が見えてきた時の感激は一生忘れられないものとなった。

五十年代は歴史・産業・地理の各班に分かれ，自由民権運動における喜多方事件，電源開発にゆれる旧宿場大内，会津特産の焼き物や漆器について研究を続け，毎年，機関誌『磐梯』にその研究成果を発表し，現在に至っている。[7]

同様に，本校生徒会誌『学而会雑誌』からも，1980年代までの地歴部の活動がうかがえる（表1）。地歴部の「歴史」をたどれば，巡検地も福島県内にとどまらず，信州や平泉，登呂遺跡にまで及ぶ広範囲の活動が見て取れる。また，地元の古墳発掘に関わったり，地域の自由民権運動に関わる資料を集めて研究大会で発表したりするなど，学校の枠を越えた社会的な活動にも関わっていたことがわかる。地理班・歴史班・産業班の3班に分かれた班別の積極的な活動など，生徒達の高い問題意識と意欲的な活動とが地歴部の旺盛な活動につながっていたことが見て取れる。こうした活動は，戦後まもなくの部活動発足以来，地道に，しかし脈々と受け継がれ，継続されていったものとうかがえる。

しかし，『学而会雑誌』の記載からは1990年ごろからの地歴部の混迷ぶりがうかがえる（表2）。部紹介において部の現状を憂える文があればまだしも，紹介そのものが載っていない年さえもある。地歴部の活動は，1990年代に入ると，急速に停滞し始めることがわかる。前出の50代半ばの社会科教員の在学時地歴部当時の述懐を聴いて驚いたという，やはり同窓生として当校に勤務する20代半ばの社会科教員の話が興味深い。彼の在学時（1995年度から1997年度）には，地歴部が存在していたことすら記憶にないというのである。高校時代，少なからず歴史に興味はあったけれども，彼の興味を満たす部活動は運営されていなかったというのだ。こうして，地歴部は1990年代に大きな低迷期を迎えることになるのである。もっとも，90年代半ばに高校時代を過ごした彼は，部活動は体育系に限ると考えていたので，卓球部に所属した，歴史系の部活が活動していたとしても，入るつもりはなかった，とも語っている。このことも，1990年代の高校生の部活動に対する認識として興味深いものがある。

こうした，社会科系部活動の混迷ぶりは，当校に限ったことではない。

たとえば，福島県いわき市にある県立磐城高校史学部は，戦後発足まもなくから，生徒を主

表２　『学而会雑誌』にみる会津高等学校地歴部の活動状況（1990年～2001年）

号数	発行年度	記載有無	記事概要		
			研究テーマ	発表	研修旅行・巡検
83	1990	×			
84	1991	○	活動なし		
85	1992	○	活動なし		
86	1993	×			
87	1994	○		ミニ文化祭参加	若松市内、喜多方
88	1995	○	部誌発行		大内宿
89	1996	○	（タイトル「崩壊寸前！地歴部再建論と活動報告」）		
90	1997	○	会津の郷土研究		
91	1998	×			
92	1999	×			
93	2000	×			
94	2001	○	会津の郷土研究		

体とした発掘作業等に積極的に取り組み，特に，1948年に神谷作古墳群から発掘した埴輪男子胡座像などは，1958年に国重要文化財に指定され，現在も同校に保管されている。「天冠埴輪」と称されるこの男子胡座像は，冠を着けた独特の形態から国内外の出品にも供され，その遺物の特徴的な点とともに，その発掘が高校生によってなされたことが常に注目されてきた[8]。ところが，同校史学部の機関誌『考古』は1985年の第22号，同じく『天冠』は1986年の第20号を最後に発行されていない。1990年代半ばの冊子には「史学部の現状は厳しい。活動している部員は部長の七海秀明（一年生）らわずか三人。」とする記載がなされている[9]。聞き取りによれば，現在はほとんど活動がないという。他地区の福島県内のいわゆる進学校でも，福島高校・安積高校には，そもそも歴史系の部活動が存在しない。福島高校には，昭和20年代前半の創設とされる社会研究部があったが，1970年代後半以来活動は休止状態にあり[10]，安積高校の社会研究部も1983年以来休部の状況にある[11]。両校とも，弁論・討論活動ともあいまって，機関誌の発行など盛んな活動が展開されてきたが，現在は，歴史系部活動が実質上運営されていない。

3．地歴部をとりまく現況

(1) 地歴部の活動

生徒自身では地歴部の活動の運営ができない中で，筆者が顧問となって後，活動プランの作成・実行に，顧問が大きく関わるようになった。こうした中で，2004年度には，毎週のミーティングを実施し，夏季巡検も新潟県長岡市で実施した。事前に河井継之助の墓のある建福寺など長岡に関わる会津若松市内の旧跡をたどるとともに，新潟県立長岡高等学校への学校訪問・生徒交流会の実施や長岡市内史跡の巡検を通じて，戊辰戦争における会津と長岡の交流のあり方を確認し，地域の歴史のあり方について考えを深めた。巡検とそれに関わる活動は，翌年，それをまとめたレポートが会津若松市郷土研究青少年の部奨励賞を受賞し，一般からも評価を受けた。その後，秋季巡検では，野岩鉄道株式会社主催「『日本奥地紀行』を歩く」に参加し，峠道をたどりながら大内宿から会津本郷町までの旧会津西街道のあり方を体感することが出来た。また，春季巡検では，いわき市を訪問し，福島県内唯一の国宝建造物であるいわき市白水阿弥陀堂とその周辺を訪れて県内史跡の理解を深めるとともに，会津とは異なるいわきの地理的特色を確認した。

2005年度には，夏季巡検で広島市を訪れ，8月6日の平和記念式典に参加した。3年生を中心に，戦後60年の節目の年に，広島に，しかも，8月6日のその日に訪れてみたいという声が持ち上がり，代表部員で広島を訪れた。2・3年生8名で訪れた8月6日の広島の朝は，雲ひとつない晴天で，そこに60年目のその日を迎えて粛然

表3　『学而会雑誌』にみる会津高等学校地歴部の活動状況（2002年～2006年）

号数	発行年度	記載有無	記事概要		
			研究テーマ	発表・受賞	研修旅行・巡検
95	2002	○	保科正之	学而祭展示	猪苗代
96	2003	○	冊子輪読		東京
97	2004	○	長岡の地理と歴史及び会津との関わり・個人発表		新潟（長岡）、大内宿、いわき
98	2005	○	広島の地理と歴史及び原爆投下の経過・個人発表	学而祭展示　会津若松市郷土研究青少年の部（奨励賞）	広島、郡山、白河
99	2006	○	上杉景勝ゆかりの神指城と会津周辺の城館・個人発表	会津若松市郷土研究青少年の部（奨励賞）	新潟（上越）、喜多方、富岡

と建つ原爆ドームは荘厳ともいえる雰囲気を醸し出していた。多くの外国人も交えた数万人ともいわれた参列者の中に入って平和記念式典に参加した生徒諸君にとって，8時15分からの1分間は，生涯忘れえぬものとなったにちがいない。巡検の成果や戦争を通してみた会津のあり方をまとめた部員の探求の跡は，「広島・戦争・会津—戦後60年，私たちが忘れてはいけないあの日の記憶—」と題して，この年の学而祭において披露することができ，一般の方々からも好評を博した。この年には，秋季巡検で郡山市を，春季巡検で白河市を訪れた。夏には，旧制中学卒業の同窓生を招いて講演会「大先輩が語る旧制会津中学校生の学校生活～戦時中を中心に～」も開催した。旧制中学の厳しい留年規定に驚くとともに戦時中の授業や学校生活などを拝聴した部員達は「会津高校で当たり前に学べる喜びを噛み締めた」「どこか違う世界の話のような気がしていた戦時中の事柄を実感できた」といった感想を残した。

2006年度には，中世城館の探求を主題とした，中央大学が主催した「全国中・高校生歴史サミット2006」に参加した。織豊期末に会津を領した上杉景勝が築城し，家康のそれへの追求が発端となって関ヶ原の戦いが起こることとなった神指城をテーマに考察を進めるとともに，夏季巡検では戦国期上杉氏の居城であった春日山城を訪れた。結果は，本選には進めなかったものの，コンクールに参加したことへの満足感とともに，地域の史跡に関して，一定の考察をなすことができたことについて，生徒は自信を深めた。会津若松市郷土研究青少年の部にも応募し，前年に引き続き，奨励賞を受賞した。この年には秋季巡検で会津若松周辺の喜多方市・会津坂下町の史跡をめぐり，春季巡検では，福島県浜通りに立地する東京電力福島第一原子力発電所を見学し，歴史的観点のみならず，地理的・社会的観点も深めた。

当部のこうした動向は，生徒自らが行動することができず停滞した部活動において，顧問主導とはいえ，その活動が活性化される中で，今度は生徒自身が部活動運営に積極的に関わるようになってきた一例といえるだろう。

(2) 社会科系部活動に対する生徒の認識

近年の活動で活況を呈しつつあるものの，地歴部をめぐる生徒の認識は依然として深刻なものがあると思われる。

実際に，部活動をめぐる生徒の認識を把握するために，2006年9月に，会津高校1・2年生127名，会津若松市内の私立高校（表中A高）2年生90名を対象に，また，2007年9月に，会津若松市内の県立高校（表中B高）1～3年生98名，郡山市内の県立高校（表中C高）2年生76名を対象にアンケート調査を実施した。調査対象とした高校は，いずれも社会科系部活動の活動が実際に行われている高校である。会津高校・B高・C高は，共学で，地域のいわゆる進学校とされている学校で，A高は女子校である。A高との比較のために，会津高では女子48名分の数値も別にまとめた。

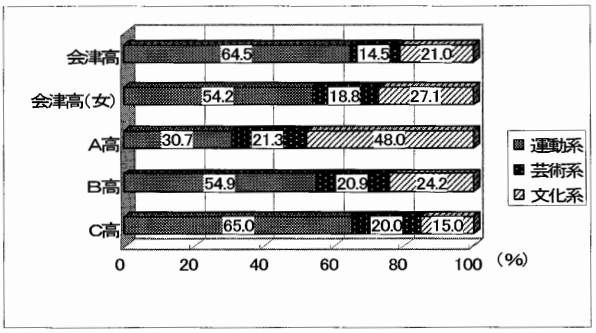

図1　参加部活動の類型別割合

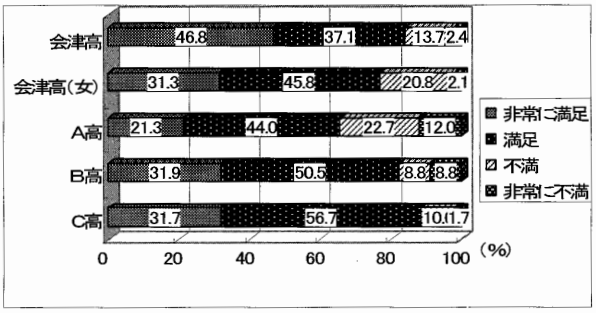

図2　部活動満足度

まず，部活動を運動系（野球部・テニス部など），芸術系（合唱部・吹奏楽部など），文化系（地歴部・化学部など）に分けて，参加部活動の類型を見る。会津高では，全体で８割弱，女子でも７割の生徒が運動系・芸術系の部活動に参加しており，文化系部活動参加は２割程度である。この傾向はＢ高・Ｃ高でも同様である。それに対して，女子校であるＡ高では，半数近くが文化系部活動に参加している（図１）。１学年40名８クラスの会津高・Ｂ高・Ｃ高に対して，Ａ高は30名４クラスで，学校規模が異なることから運動系部活動の数に違いはあるが，Ａ高では文化系部活動の

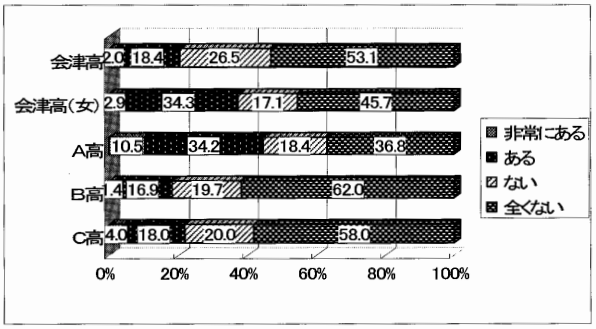

図３運動系・芸術系部活動参加生徒の文化系部活動志向度

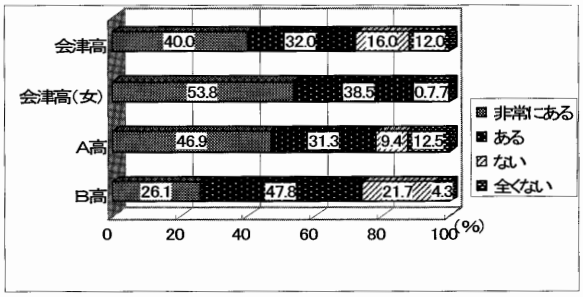

図４文化系部活動参加生徒の運動系・芸術系部活動志向度

（Ｃ高を除く。Ｃ高は対象生徒数が少なかったため、除外した。）

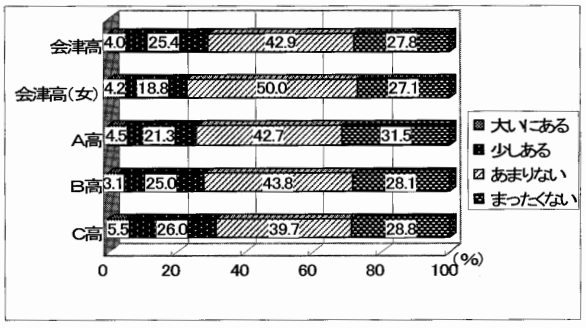

図５　社会科・歴史系部活動への関心度

参加割合が高い。その活動の満足度は，会津高・Ｂ高・Ｃ高で８割を越す生徒が満足だとしているのに対して，Ａ高では６割程度である（図２）。会津高の回答を系別にみると，運動系・芸術系がいずれも９割程度の生徒がその活動に満足感を示しているのに対して，文化系部活動生徒の満足度は，６割程度にすぎない。満足に思う理由も，運動系が「楽しい」「やりがいがいある」といった事柄をあげるのが多いのに対して，文化系では「活動がない」「早く帰れる」といった消極的要因を満足感の理由として挙げているものもある。

運動系・芸術系部活動生徒の文化系部活動志向度をみると，Ａ高では４割強が志向性を示すが，他校では２割程度にすぎない（図３）。逆に文化系部活動生徒の運動系・芸術系部活動志向度は，各校とも７割を越し，特に会津高女子で９割，Ａ高で８割弱ある（図４）。「汗まみれの青春時代をすごしたかった」「中学校までの部活動を続けたかった」など，その理由には，「やむをえず」文化系部活動に所属しているが，本来は運動系・芸術系部活動に所属したかったとする，部活動に対する生徒のとらえ方が見えてくる。

同時に，社会科・歴史系部活動に関心があるとする生徒は，各校とも３割程度である（図５）。後述するが，Ａ高には考古学研究部があり，考古学を専門とする顧問教諭指導の下，実際の遺跡発掘に関わるなど，積極的な活動を展開しており，当項目に対しても，所属生徒からは，高い関心と部活動にかける熱意を示す回答が寄せられた。しかし，その一方で，そうした関心を持つ生徒は一部にすぎないことがうかがえる。また，各校とも共通して，「そもそも歴史に興味がない」「歴史に興味はあるが部活でやろうとは思わない」「歴史は好きだけど暗そうなイメージがある」「部活でやるほどのことでもない」「どんなことをやるのかわからない」といった理由を挙げながら，歴史系部活動に関心がない，とする生徒からの回答が多く示された。生徒達には，部活動は運動系・芸術系に限るとする根強い意識があり，一連の回答

は，それらを如実に示すものとなっていることがわかる。

4．社会科系部活動低迷の外的要因

(1)「時代劇を見ない」子どもたち

前節で取り上げた意識調査において，生徒の歴史認識をめぐる問いかけも設定した。その中で，歴史を勉強したり，学んだりする上で，影響を受けたメディアがあるかどうか問う項目を設けた。歴史に関心を持つきっかけは，小・中学校での歴史授業や家族，身の回りのものの影響など様々だろうが，身近に接する歴史像の形成において，メディアのもたらす影響は非常に強いものがあるだろうと考えたからである。その結果，会津高では，全体で6割強，女子では7割弱の生徒が歴史的関心にメディアの影響を受けたとし，B高・C高でも5割強の生徒がその影響を挙げている。反対に，A高では，6割弱の生徒がそうしたメディアの影響は受けていない，とする回答を示した（図6）。このことからは，メディアの影響を受けることなく，歴史情報に自らアプローチし，能動的な態度で自らの確固とした歴史認識を形成している者がある，ということを見いだすこともでき，実際，そうした生徒も多くいるにちがいない。しかし，A高生徒の回答を見ると，そうした結論が全体にあてはまると考えるのはやや早計であることがわかる。同高生徒で，歴史関係でメディアに影響を受けていないとし，なおかつ前記の歴史関係の部活動に関心がないとした生徒は，全体の約半数，歴史関係でメディアに接しておらず，歴史関係の部活動に関心がない，また，歴史を学ぶこと自体にも関心がないとする生徒が全体の約3割にのぼるからである。このことからは，身の回りのメディアから流される歴史情報に無頓着で，その結果，歴史を学ぶこと，あるいは歴史探求に関連する活動に関心がうすい，さらには，歴史に興味がないことで，ますますメディアからの歴史情報に接する時間が少なくなっているという生徒の一面がうかがえる。

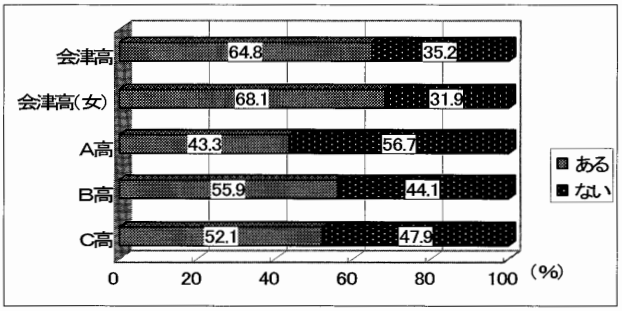

図6　歴史的関心へのメディアの影響度

では，生徒の歴史的関心を引き出すメディアは，何であろうか。近年の状況からインターネットやゲームなどでの影響も考えられるが，この調査で最も高い割合を示したのは，やはりテレビであった。各高とも，テレビを挙げた者が圧倒的に多かったことがわかる（図7）。NHK放送文化研究所の調べによると，1985年調査で低下したテレビ視聴時間は，1995年には逆に上昇，2000年にもさらに増えている。テレビ離れがいわれながらも，その視聴時間が再び上昇したことについて，同研究所は「われわれは社会を，生活を，思想を，ほとんどテレビという感覚器官を通して無意識に“感じている”状態なのかもしれない」と総括しており[12]，こうした状況は高校生の現在の生活，またその成長過程においても同様なことがいえるのだろう。

さて，そのテレビが取り上げる歴史関係の番組割合はどのように変化したのだろうか。

1976年から2006年まで，10年おきに9月最初の1週間の在京キー局（NHK総合・NHK教育・日本テレビ・TBSテレビ・フジテレビ・テレビ朝日（NETテレビ）・テレビ東京（東京12チャンネル）における歴史関係テレビ番組放映量の変化を確認してみた（表4, 図8,『朝日新聞縮刷版』1976年9月5日～11日，同1986年9月7日～13日，同1996年9月1日～7日，同2006年9月3日～9日参照）。1976年には，18時台に人形劇「真田十勇士」(NHK) が放映されているほか，「伝七捕物帖」（日本テレビ）「江戸の旋風」（フジテレビ）など20時から21時にかけてほぼどの

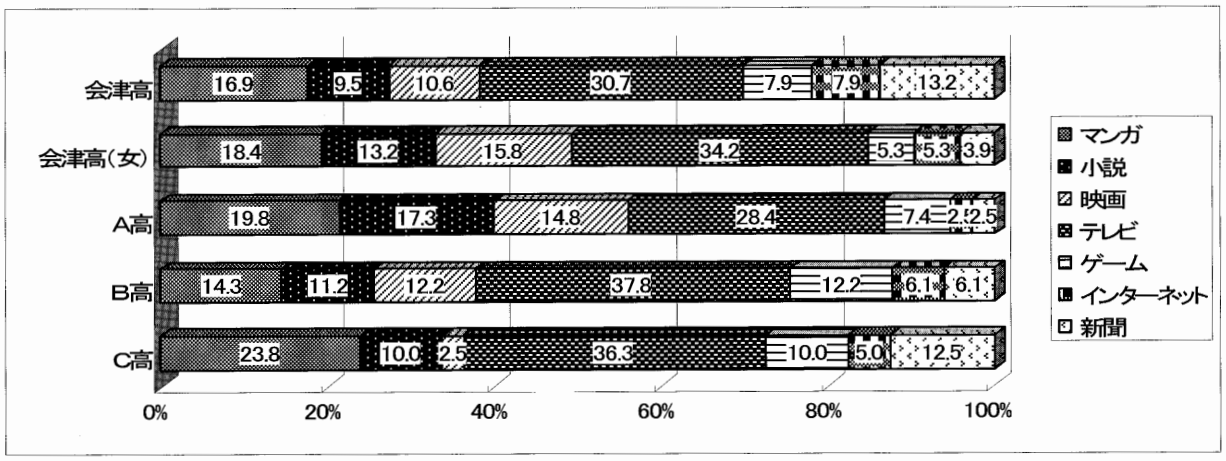

図7　歴史的関心を誘引したメディアの割合

局も時代劇を放映している。1週間の歴史関係番組の総放映時間は2935分，19時から23時帯のいわゆるゴールデンタイムに関わる時間帯では1480分を数え，同時間帯の時代劇（主に江戸期を題材）または歴史ドラマ（明治期から昭和戦前期を題材）の本数は14本にのぼった。1986年，1996年には，総放映時間が，それぞれ，2340分，1620分と減り続けていくものの，「遠山の金さん」（テレビ朝日，1986年9月9日）「大岡越前」（TBSテレビ，1996年9月2日）などが放映されているほか，「世界ふしぎ発見！」（TBSテレビ，1986年9月13日）や「驚きももの木20世紀」（テレビ朝日，1996年9月6日）などいわゆる歴史バラエティ番組の放映も見られる。ところが，2006年にいたっては，総時間数の減少（1355分）はもとより，19時から23時帯の時代劇・歴史ドラマは「大河ドラマ　功名が辻」（NHK）「水戸黄門」（TBS）等のいわゆる定番時代劇4本に限られ，前年同時期には2本しか放映されていないことがわかる。当時間帯の時代劇・歴史ドラマの放映量は，1976年から2006年にかけておよそ3割程度にまで低下したことがわかる。もっとも，こうした動向は，時代劇のみならず，連続ドラマ全体の視聴率低下傾向から，番組構成が変わってきていることによるものとされるが，時代劇・歴史ドラマの比率の低下は顕著なものがある。

テレビの放映総時間に占める歴史関係番組の割合も変化している（図9，出典は表4，図8に同じ）。テレビ放映の総時間数は1976年がおよそ919時間であったのに対して，1986年に976時間，1996年に1072.5時間と増え，2006年には，1976年の1.2倍にあたる，1148時間に増加している。一方で歴史関係テレビ番組の放映時間は1976年に比べて2006年は4割強にすぎず，総放映時間に占める割合も，1976年には5.3％を占めていたものが，1986年に4.0％，1996年に2.5％，2006年には1.9％を占めるにすぎない。このように，歴史関係の番組がテレビ番組全体に占める割合もまた，大きく減少していることがわかる。

そうした中で，日本史授業において，時代劇の話をおりまぜた時，最近の生徒は以前の生徒よりも反応しなくなっているように感じる[13]。現在の生徒たちは，「時代劇を見ない（見ようとしない）」，あるいは「時代劇を見たくとも見られない」状況にあるからである。講談から映画，テレビへ，媒体は変わりながらも時代劇・歴史ドラマは一つの娯楽として親しまれてきた。物心ついたころから，そうした番組などに接することで，子どもたちは，フィクションを交えつつも，歴史の一端に触れ，何らかの歴史的興味を構成してきたのである。それは，現在の高校生でも，歴史的関心に対するテレビの影響力が高いことからもうかがえる（図7）。ところが，何らそうした番組に接しない生徒が多くあり，近年の大河ドラマの

傾向にあるように，いわゆる人気アイドルを起用することで，番組への関心を高めることに躍起になっているものの，何ら関心を引くものとはなっていない現況がある。

歴史関係テレビ番組の減少にみえる，国民共有の娯楽であり，教養としての歴史的事物に関する意識の喪失状況は，当校地歴部の混迷と軌を一にするものがある。社会全体における歴史事象への関心の低落化が，すなわち生徒の歴史的探究心の低下，歴史系部活動への関心の低さにもつながっていくのではないだろうか。

表 4　歴史関係テレビ番組放映量の推移（9 月第 1 週）

時間帯		6:00～14:00						15:00～19:00						19:00～23:00						23:00～翌6:00						曜日計	週計（分）
種別		A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F		
1976年	日													105 ②	30 ①		135 ②									270	2935
	月			45 ①				60 ①					15 ①	120 ②	45 ①	60 ①				60 ①						405	
	火			45 ①				120 ②					15 ①	180 ③						60 ①						420	
	水			45 ①				120 ②					15 ①	120 ②			45 ①		30 ①	60 ①						435	
	木			45 ①				120 ②					15 ①	120 ②				45 ①		60 ①						405	
	金			45 ①				120 ②					15 ①	180 ②			85 ①		30 ①	60 ①						535	
	土	45 ①			90 ①			60 ①			60			120 ②					30 ①	60 ①						465	
1986年	日						15 ①							45 ①												60	2340
	月	180 ③						60 ①						60 ①				45 ①		60 ①						405	
	火	180 ③						60 ①						180 ②						60 ①						480	
	水	180 ③						60 ①						45 ①				45 ①								330	
	木	180 ③						60 ①						120 ①												360	
	金	120 ②						120 ②						60 ①			45 ①		30 ①							375	
	土	105 ②											30 ①	105 ②		60 ①			30 ①							330	
1996年	日													45 ①		60 ①					5 ①					110	1620
	月	60 ①						60 ①					10 ①	60 ①												190	
	火	60 ①						60 ①					10 ①		45 ①			30 ①		60 ①	5 ①					270	
	水	60 ①						60 ①			30		10 ①	60 ①				30 ①	30 ①	60 ①						340	
	木	60 ①						60 ①					10 ①	60 ①		45 ①					5 ①					240	
	金							60 ①					10 ①	45 ①		60 ①										175	
	土	45 ①			30 ①		20 ①		30				10 ①	60 ①		60 ①	40 ①									295	
2006年	日													45 ①												45	1355
	月	120 ②						60 ①					10 ①	60 ①												250	
	火	120 ②						60 ①	45				10 ①	60 ①												295	
	水	60 ①						60 ①					10 ①		45 ①				30 ①							205	
	木	120 ②						60 ①					10 ①	45 ①							45 ①					280	
	金	120 ②											10 ①													130	
	土	45 ①			45 ①											60 ①										150	

注1 番組種別の記号は、以下の番組を示す。A：時代劇・映画・歴史ドラマ・、B：歴史ドキュメント、C：歴史バラエティ、D：伝統・古典芸能、E：歴史教養、F：歴史関連アニメ・人形劇

注2 表中上段数字は時間(分)、下段丸数字は本数を示す。時間は単位時間とした。

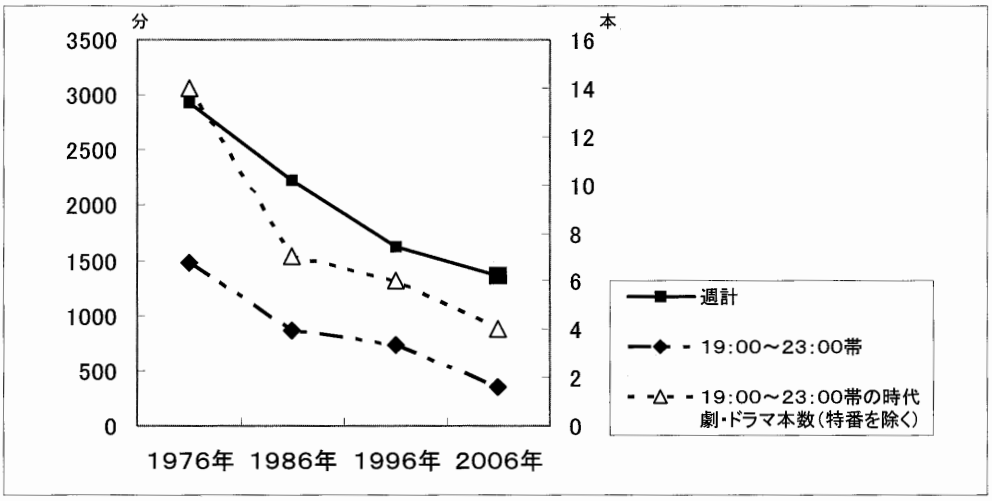

図8　歴史関係テレビ番組放映量の推移図（9月第1週）

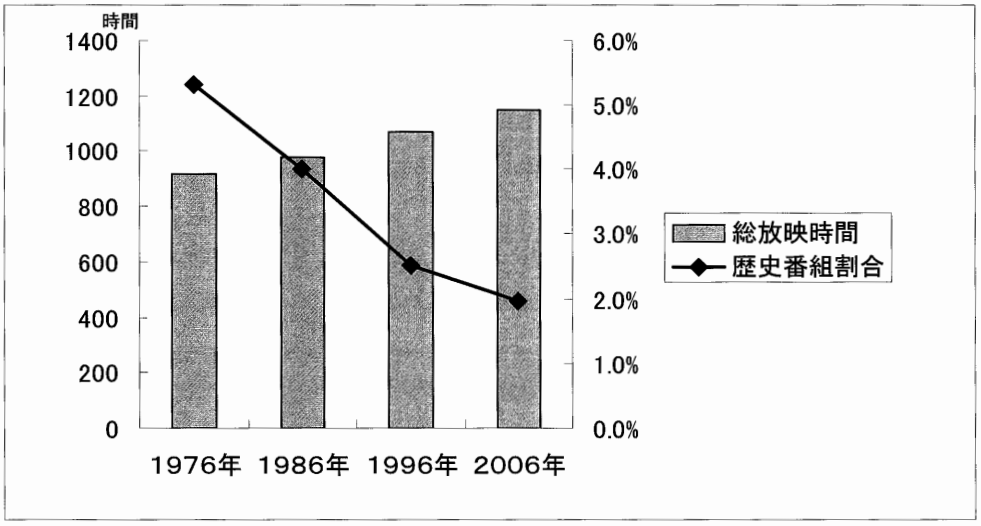

図9　歴史関係番組放映量の総放映時間に占める割合推移図（9月第1週）

（注：総放映時間の算出は番組終了時間の明示のないものは一部推計）

(2) 歴史系部活動における顧問教員の存在感

生徒の歴史への関心が低下し，運動系・芸術系に対する文化系ひいては歴史系部活動の位置づけが弱まっていく中で，顧問教員の部活動への関わりが課題になってくる。1981年度から2007年度までの会津高校とその近隣高校における歴史系部活動顧問教員の変遷をまとめると下表のようになる（表5）。

A高・B高は，それぞれ前節対象校と同一校である。歴史系部活動の顧問教員の変遷をみると，A高は，日本史を専門とする同一教員が20年以上にわたって顧問を務めており，B高では，1987年以来，ほぼ一貫して日本史を専門とし，主に40歳代の教員が顧問を務めていることがわかる。先にも触れたように，福島県内の多くの進学校で歴史系部活動が機能していない状況にあって，会津地区は比較的歴史系部活動の活動が維持されている。A高は，先述したように，顧問教員が考古学を専門とし福島県内の遺跡発掘にも多く関わってきたことから，月に1回程度，生

表５　会津高校とその近隣高校における歴史系部活動顧問教員の変遷

	会津高校			A高		B高		
年度	性別（年齢）	専門科目	部顧問兼務	性別（年齢）	専門科目	性別（年齢）	専門科目	部誌発行
1981	男性（37）	日本史		男性（34）	日本史	不明		×
1982	〃			〃		不明		×
1983	〃			〃		男性（56）	地理	○
1984	〃			〃		〃		○
1985	〃			〃		〃		×
1986	〃			〃		〃		×
1987	男性（57）	日本史		〃		男性（40）	日本史	○
1988	〃			〃		〃		○
1989	〃			〃		〃		○
1990	男性（49）	日本史	出版（委員会）	〃		〃		○
1991	〃			〃		〃		○
1992	男性（23）	世界史	ボート	〃		〃		○
1993	男性（31）	日本史	野球	〃		〃		○
1994	男性（42）	数学		〃		〃		○
1995	〃			〃		〃		○
1996	〃			〃		〃		○
1997	女性（34）	公民		〃		男性（56）	日本史	○
1998	〃			〃		〃		○
1999	男性（26）	世界史(講師)		〃		〃		○
2000	男性（58）	世界史		〃		〃		○
2001	〃			〃		男性（45）	日本史	○
2002	男性（34）	日本史	剣道	〃		〃		○
2003	〃			〃		男性（54）	地理	○
2004	〃			〃		〃		○
2005	〃		バドミントン	〃		男性（47）	日本史	○
2006	〃			〃		〃		○
2007	〃			〃		〃		○

注　顧問教員年齢は、表初出年度の年齢

徒を引率して近隣大学が中心となる遺跡発掘に参加させている。1980年代初めには，地方公共団体の依頼を受けて，交通費等の支給を受けながら，当該生徒を中心として遺跡発掘に携わったこともあったという。B高では，生徒の研究をまとめた部誌がほぼ毎年発刊され，仙台・平泉などを目的地とした巡検も毎年実施されている。これら２校の事例は，顧問教員の高い専門性と意欲とが歴史系部活動に反映し，部活動運営を活性化させていったものと捉えることができる。

一方で，会津高校の地歴部は，1990年代以降，社会科以外の教科の教員や，社会科でも日本史以外の科目を専門とする教員が顧問を務めていることが多い。野球部顧問などを兼務している場合もあるほか，年齢も20代前半か50代後半の教員が目立つ。既述した地歴部の1990年代以降の混迷は，生徒の意識の変化とともに，それを補う顧問教員の指導がなされなかったことによるものとも見ることができるだろう。生徒の歴史への興味・関心が低下していく中で，その存在感を低落させていった歴史系部活動の運営において，それを主導する顧問教員の適切な配置が必要であった。そうした人的配置の結果，継続した活動がなされたA高・B高に対して，それがなされなかったことで，会津高地歴部は「登録するだけ」で実質的な活動のない部活動となってしまったわけである。こうした状況は，その活動のない，他の進学校歴史系部活動においても同様であったことと思われる。

歴史系部活動における顧問教員の主導的役割が求められていく中で，新たな課題も指摘しなければならない。歴史系を担当する教員の専門性

が，著しく低下しつつあるということである。そうした状況を象徴する事柄が近年あった。山川出版社が発行する『歴史散歩』シリーズ[14]は，各県の高校教員が主に執筆しており，福島県でも県高等学校社会科研究会が請け負っている。10年に1度の改訂時期を迎え，2001年から編集が進められたが，各地区で，執筆者が集まらないということが問題となった。10年前であれば，各地区ごとにそれぞれの地域素材を専門に扱える教員がいて，彼らによって，頻繁に勉強会を開くなどしながら編集が進められたものだが，現在は，そうした教員がなかなかいない。地区によっては，退職した教員を執筆者に加えることで急場をしのいだところもあった。このことは，「授業」を教えることはできても「歴史」を専門としてそれを自ら学び研究する教員が減っているとされる現状を指し示す事実にほかならない[15]。すなわち，歴史系部活動を主導できる力量と意欲を持った教員自体が多くはなくなってきているのである。

5．「学び」を忌避する生徒と「おたく」化される社会科系部活動

佐藤学は，1980年代からの子どもたちの学ぶ姿勢の変化を指摘し「学ぶことに対するニヒリズム（虚無主義）とシニズム（冷笑主義）」が進行し「『学び』からの逃走」が進んでいることを示した[16]。また荷宮和子は若者の意識について1993年ごろから消費行動における「『ランキング至上主義』」が進行し，「（ランキングに沿わず）『フツーじゃない』」とされた者は「『おたく』」とされて排除される傾向が表れたと指摘する[17]。

こうした指摘は，1990年ごろからの地歴部の変化の状況を裏打ちするものともなっている。すなわち，多くの生徒が「学び」を忌避し，その存在感が減退していく中で，部活動に単純な「楽しさ」のみを求める動向は，知的好奇心を探求する部活動を埒外としていく傾向を生じさせ，「部活動＝体育・芸術系」の呪縛が進行する中で，それ以外の文化系部活動に所属することは，もはや「おたく」の領域とされていく。同時に，自ら課題を設定し，それに基づいて自主的に活動を運営していくことが困難になっていく生徒の状況もそれに拍車をかけることとなって，文化系部活動の混迷を招くこととなる。文化系から体育系まで，生徒の関心と志向性をもとに多様な領域で運営され，それぞれの活動が尊重されてきた高校部活動は，個性が喧伝されながら，一方でその多様性を受容しない「若者の意識」において，むしろ，その領域が狭まってきてしまっている状況があるのである。

社会における社会科系部活動の位置づけや教員のあり方も変化した。会津高，磐城高の歴史系部活動が昭和20年代に地域の遺跡発掘で成果を挙げたように，遺跡発掘等を担当する専門家や専門機関が発達していない時期には学術的分野においても高校生が頼りにされていた面がある。同様に，地域の歴史専門家として高校教員が重用され，市町村史の執筆者に名を連ねる者も多かった。しかし，遺跡調査を主管する機関が各市町村に設置されて専門家が配置されることで高校生への依存度は減少したし，研究者の層が厚みを増していく近年では，高校教員が市町村史を執筆することはほとんどなくなってきている。社会の状況が変化していく中で，これまで複合的に関わっていた社会教育的分野と学校教育的分野とが機能的に分離していったわけだが，その結果はそれぞれの専門領域をむしろ踏み出すことがなくなってしまっている現状が見いだせる。「授業だけ」あるいは「スケジュール通りに体育系部活の指導だけ」していればいいと考える教員と，「勉強だけ」あるいは「楽しみとしての体育系・芸術系部活動だけ」を既定通り行おうとする生徒たちの間で不思議な調和が形成され，正に歴史系部活動は混迷を余儀なくされているのが現実なのである。

「理科離れ」が喧伝されその危機意識の顕著な理科系部活動は，多様なコンクールの設定もあっ

て，その活動を維持しているものも多い。一方で，社会科系部活動が参加するコンクール等はほとんどないといってよい[18]。社会科系部活動は，社会における歴史離れと教育現場における意識の変容に何ら対応できず，その活動を減退させていったのが現状なのであり，そうした対応の遅れは，社会科教育全般の課題としても取り上げることができるであろう。歴史認識のあり方が広く取り上げられていながら，それへの対応が効果的になされているとはいえないからである[19]。社会科系・歴史系部活動の低迷は，生徒・教員両面からの，歴史教育環境の変容を証左するものであり，こうした状況を認識しつつ，改めて対峙していくことが求められる。歴史を中心とした社会科系部活動をより活性化させ，その過程で歴史的関心を生徒に呼び覚ますことは，その一つの方策といえるのである。

＜註＞

(1) 東博文，岡田敞榮「某進学高校生徒における日常生活への影響要因－部活動との関係を中心として－」『鹿屋体育大学学術研究紀要』25号、2001年。

(2) 拙稿「本校生の戦いぶり」『上級学校進学資料』福島県立会津高等学校、2004年。

(3) 例えば、学校生活と部活動の関係について、白松賢は「部活動に参加する生徒は、学校適応の度合が高」く、「部活動は参加者の学校への適応を維持、増大させる機能を有している」と分析している（白松「生徒文化の分化に与える部活動の影響」『子ども社会研究』第1号、1995年）。

(4) 前注(1)に同じ。

(5) 白松前掲論文。

(6) 会津地方における考古学研究の過程をまとめた文章に、昭和20年代に本校地歴部に籍を置き、考古学研究に取り組んだ鈴木茂光氏らの活動が、次のように触れられている。「会津高校に進んだ鈴木茂光氏は地歴クラブの会報『磐梯』第三号（昭和二十八年）に「翁島村諸古代遺跡と遺物」を発表した。会津高校地歴部の部室には水アカで赤くなった鈴木氏らの採集品が同校の二度の火事をくぐり抜けて今でも保管されている。」（「会津の考古学史」『会津若松市史１　歴史編①原始・古代１　あいづのあけぼの』2007年、72頁）。

(7) 会津高等学校百年史編纂委員会編『会津高等学校百年史』1991年、1147頁－1148頁。

(8) 福島県立磐城高等学校百年史編集委員会編『創立百年』1996年、1193頁－1198頁。

(9) 福島民報社編『磐陽の学び舎に－磐城高校百年』1996年、149頁。

(10) 福島県立福島高等学校創立百周年記念事業実行委員会出版委員会編『福高百年史』1999年、462頁。

(11) 安積高等学校百年史編纂委員会編『安中安高百年史』1984年、1005頁－1020頁。

(12) NHK放送文化研究所編『日本人の生活時間・2000－NHK国民生活時間調査－』日本放送出版協会、2002年。

(13) 2007年5月に会津高校2年生76名に主な時代劇の認知度を問うたところ、それぞれ、「水戸黄門」100%、「遠山の金さん」70.4%、「銭形平次」57.7%「大岡越前」40.8%「鬼平犯科帳」28.2%であった。「水戸黄門」はすべての生徒が認知しているものの、その他のいわゆる定番時代劇に関する認知度は著しく低いことがわかる。

(14) 福島県版の指針版は、福島県高等学校地理歴史・公民科（社会科）研究会編『歴史散歩⑦　福島県の歴史散歩』山川出版社、2007年。

(15) 岩城卓二は、日本史教員の力量低下の影響を危惧し、「子どもの学力低下もさることながら，教員の学力低下も進行しているのではないか」とする厳しい指摘を加えている（岩城「歴史教育と教員養成課程の現状」『日本史研究』第499号、2004年）。

(16) 佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』岩波ブックレット524号、2000年。

(17) 荷宮和子『若者はなぜ怒らなくなったのか』中公新書クラレ、2003年。

(18) たとえば、理科系部活動対象のコンクールには、

全日本科学教育振興委員会主催「日本学生科学賞」、日本科学教育学会主催「u-18科学研究コンクール」、朝日新聞社主催「ジャパン・サイエンス&エンジニアリング・チャレンジ（JSEC）」などがありその他大学主催のコンクールもいくつかある。それに対して、社会科・歴史系部活動対象のコンクールは、旺文社主催「全国学芸科学コンクール」が確認される程度である。中央大学主催「全国中・高校生歴史サミット」は意欲的な試みであったが、2006年度のみの開催で、以後開催されていない。

(19) 一方で、福島県立博物館では、2007年、高校生を対象として月2回連続11回にわたる「高校生のための考古学基礎講座」を開設する試みを始めた。博物館からのそうした取り組みの成果と課題について、今後精査する必要がある。